

『新統古今和歌集』

和歌文学体系二二 明治書院

村尾誠一

かつて詩人佐藤春夫は、日本文学の骨格をなすものは八

代集であると唱え、これは日本文学の特質をよくとらえた卓見だとされている。確かに、ヨーロッパ文学あるいは中国文学と比べても、抒情的性格が色濃い日本文学ことにも古典文学を総体としてとらえようとする、そこには万葉集に始まる和歌文学の伝統が、太い血脈として浮かび上がってくる。わが国の和歌文学を代表するものが、古今集から新古今集に至る八つの勅撰和歌集であることは事実だが、勅撰和歌集の伝統は新古今集をもって終わるのではなく、世が王朝時代から中世に移っても連続と続いて実に十五世紀にまで至り、その数も二十一に上る。勅撰和歌集の掉尾を飾ることになったのが、一四三八年に飛鳥井雅世を撰者として成った二十一番目の勅撰和歌集である『新統古今和歌集』である。

総じて中世和歌などというものは一般の読者にはなじみが薄く、専門の国文学者以外にはこれに親しむ人も少なからうが、それはひとつには、一般の読者が近づき得る懇切な注釈をほどこされたテキストが、容易には手にできない

かつたからでもある。その問題のひとつが、このほど「和歌文学体系」の一冊として世に出た、村尾誠一『新統古今和歌集』によってみごとに解決された。最後の勅撰和歌集となったこの歌集について、村尾氏は「解説」の中で、

『新統古今和歌集』に関する研究は、伝本に関する調査研究をはじめ、十分になされているとは言えない。偶然であれ、勅撰和歌集の掉尾を飾ることになった集でありながらも、文学史の概説的な記述の中でも、ほとんど顧慮されないままであるというのが現状であろう。」

と述べている。そのあまり「知られざる」歌集が、わが国における中世和歌研究の権威である久保田淳氏の高弟の一人であり、中世和歌研究の分野で近年着実に研究業績を上げつつある村尾誠一氏の手で、五百頁を越えるわが国最初の校注本として、専門家を含む世の読者に供せられたのである。まずそのことを喜びたい。

本書では、中世和歌の専門家としての確かな鑑識眼に基づいたテキストの校訂がなされ、二十巻、二千首を越える和歌のそれぞれに懇切な注釈がほどこされているばかりか、先行研究を十分に踏まえ、著者の中世和歌研究の成果が凝縮されている「解説」と、作者名をはじめとする一〇〇頁にも及ぶ行き届いた索引が付されている、堂々たる学問研究の成果である。評者は学問としての文学研究にはどちらかと言えば懐疑的な者だが、古典文学を対象とし、しっかりとした文献学の基礎に立ったこういう研究に、深く敬意を表することにはやぶさかではない。洋の東西を問わず、古典研究というものは地味であって多大な努力と時間を要

し、その割に脚光を浴びることが少ない。それは訓古の学として、写本、伝本の校合、テクストの腑分けと措定、古註参照といった地道な作業を伴うものであるから、研究対象とする作品に対する深い愛情が無ければ、到底成り立つものではない。ことにも、二十一番目の勅撰和歌集の注釈ともなれば、収められた歌の典故を探り、五百年にもわたる和歌文学の言語の伝統を確認し、その変容の様を明らかにするためには、そこに至るまでの万葉集以来の膨大な数の歌に通じていなければならぬ。『国歌大観』を参照すればそれで済むというものではなからう。村尾氏がよくこの地道な学問的作業に耐え、和歌文学に関する豊富な知識を傾注して、『新統古今和歌集』というそれ自体が地味な中世和歌の姿を、読者の前に明らかにし得たことは称賛に値する。村尾氏の中世和歌に対する深い関心と愛情、それに積年のたゆまざる研鑽が、このような形で立派に結実したのである。

ここで敢えて蜀を望めば、村尾氏は「解説」で、この歌集の文学的特質について、もう少し積極的に御自分の意見を開陳してもよかつたのではなからうか。氏は「この集がどのような特質を持ち、それが文学史の上でどのように評価し得るのかという問題については、現在の段階では何らかの言説を作り上げるのは容易ではない。」と述べて、御自分の判断を強く押し出すことを控えているが、和歌の一アマトゥールとしてはその辺りも伺いたいところである。慎重な学究として、氏は軽々に自説を読者に押しつけず、こ

の歌集の文学的特質やその評価について、今後の研究にゆだねるか、読者の判断にまかせようというのであろう。今後はこの歌集に収められた歌人の作品について、文学的評価や価値判断を含む研究を展開し、王朝和歌に比べてその全容がまだ明らかでない中世和歌の特質を明らかにしてゆくことが期待される。

最後に、蛇足と承知でもう一言付け加えると、村尾氏のこの労作を卒読したおかげで、十五世紀に成立した最後の勅撰和歌集であるこの歌集が、もはやいかんともしがたい和歌文学の衰弱、衰退した姿を示していることも確認できた。収められた当代の歌人の作品の大方は形が整い、品良く、修辭に巧みできれいにまとめられているが、迫力に乏しく、心打たれる作は稀であった。あたかもビザンチン時代のエピグラムを読んでいるがごとき心地であった。無論、和歌の一素人がこんな勝手な印象をもらせるのも村尾氏の堅実な学問的な仕事があつての話だが。

(杏掛良彦)